

教育のイメージ ⑥ もう1人のじぶん

理事長 片山喜章

認定こども園制度が、いよいよこの4月からスタートします。いまだに詳細が見えず、今後、保育・教育内容についても論議が及ぶと推されます。しかし、あれこれ議論されて、国の「指針」や「要領」が改定されても、日本全体の保育の質改善は、なかなか期待しづらいのが現状です。

私が期待できるのは、日々の保育に追われながらも、常に「より良い保育とは、なんぞや？」と実践を通して探求している各園の姿です。関東圏、関西圏、それぞれで、輪番で「保育環境評価スケール」を用いて数値に現して評価し、公開保育を通して、相互に高め合って切磋琢磨する法人全体の風土です。訪問者は、自園の課題は棚に上げて、当該園の保育を鋭く観察し、遠慮なく指摘することに努める、この取り組みによって“もう1人のじぶん”ができる、そこに大きな意義がある、と考えます。仲間の園を鋭く洞察し意見を述べた“もう1人のじぶん”が、自園に戻った時、自園の課題を鋭く洞察し、言及し、意欲的に改善に取り組む主体になりうるからです。

このような法人内の園どうしが、互いに自園の保育を見せ合って、評価し、支え合う、そんな関係性が、より良い保育を保障し、現在進行形で快調に前進させている、と実感しています。

保育も同じ事です。友達、先生（親）の影響を強く受けながら、多彩な活動を通して、その子のなかの“もう1人のじぶん”が、清く、強く、おおらかに育つことを私たちは期待します。

概して、大人は、子どもが「悪さ」をすると、その子を戒めます。しかし、大人の叱責の成果というよりも、その子の中の“もう1人のじぶん”が自分を戒めるから叱責の成果が出ると考えられます。そうなるためには、大人との信頼関係づくり（その子の言動の意味を理解し、寄り添い、励まし、叱るべきは見逃さず適切に叱ること）がとても大切です。それが、子どもどうしの自制を促し合う関係をつくります。大人の怒りや不快を感情的にぶつけると、逆にその子の中の“もう1人じぶん”が傷つけられ、心の芯が弱くなり、その子らしさを歪めてしまいかねません。

子どもに限らず、すべての人の中にも“もう1人のじぶん”が居て、それが人生を左右するものです。保育者の場合、ふつつ、個々の子どもが素直で、集団として落ち着いた状態であると、快いです。しかし同時に、“もう1人のじぶん”の中から、深い“子ども理解”や“願い”が湧き出ることがあります。園運営の基本は、保育者集団全体が“もう1人のじぶん”の内なる声に耳を澄ませる日常を創り出すことです。そして、その子の適性を認め、理解し、人格、人権を尊重し、さらには、神の子、魂存在という普遍的な真理から愛情を注げるように深化することをめざす事。そこに、大人の本来の役割、教育の本質的なテーマが息づいていると実感しています。

いま、各園は、「発表会」の劇のお稽古が佳境に入っています。稚拙でも、役柄を演じようと懸命にがんばっている姿が、“もう1人のじぶん”づくりに挑んでいる姿に見えたりもします。